

野生動物との共存をめざして①



「空の王者」オオワシをはじめ、大型の野生動物たちが多く生息する北海道。彼らを支える豊かな生態系の保全と復元に向けて、知恵を結集する必要がある。(北海道白糠町、撮影筆者)

北海道における野生動物問題

北海道の豊かな自然環境を構成するさまざまな生物たち、私たち人間の営みが拡大していくにしたがって、狭められ分断されていった生態系。こうしたなかで今、さまざまな公共施設で、地球環境や身の回りの自然とのやさしい関係を再構築するための取組みが始まっています。

このシリーズでは、野生動物に配慮した公共施設整備のあり方を探ります。

体数コントロールに一役買っていた肉食獣エゾオオカミを絶滅させたのも人間です。

こんな声が聞こえてきそうです。何もイトウを滅ぼそうとして河川工事してきたわけじゃない。シカたちを増やそうと思つて畑や林道を整備したわけでもない。だいたいシカ保護が目的だった禁猟措置は成功したつてことじゃないか……。そう、個体群を絶滅させたり生態系を破壊させたりなんて、きつとだれも望んではいなかったはず。これは意図せざる結果であり、「後の祭り」と聞き直ることも不可能ではないでしょう。

けれどそれでは私たち人間社会はあまりに無責任過ぎる、と私には思えます。

「フィードバック管理」の胎動

コンピュータプログラミングの基礎用語に「フィードバック機構」というのがあります。あらかじめ設定した目標値とのずれを検出し、それを最小化するよう系を制御し続ける仕組みのことです。

例の「責任」を果たし切るのに、今私たち社会が採用すべき態度はこれしかない、と私は思っています。千変万化の自然を相手にしている限り、施策の結果に想定外のずれが生じるのは仕方がない。ただしそれを「後の祭り」と放置せず、すぐ改善の策につなげていく——そんな謙虚な姿勢への転換です。

いったん決めた事業計画でも「不都合が見つかったらそのたびにこまめに計画変更しなさい」というわけですから、従来の公共事業のやり方とは正反対かもしれません。でも道内には胎動があります。例えば、道東の別寒辺牛川上流域で巨大な砂防ダムが建設されていますが、そこが重要なイトウ繁殖地だと指摘されて、当局は造つたばかりの堤体にスリット(隙間)をうがつことを決めました。そのうえ、本当にイトウがスリットを通過するかどうか、工事後も監視して、もしダメなら別の方法を再検討す



イトウ(北海道倶知安町、撮影筆者)



エゾシカ(北海道西興部村、撮影筆者)



キタキツネ(北海道恵庭市、撮影筆者)

知床は北海道のシンボル?

「北海道」「野生動物」といったことが並ぶと、読者のみなさんは例えば知床半島の風景を思い浮かべられるのではないのでしょうか。国際連合教育科学文化機関(UNESCO)の世界遺産リストに登録された昨年とりわけ、知床半島の美しい映像が国中に放映されました。深い森を貫く清流、ひしめき合う遡上マスの群れ、そのマスを水しぶきを上げて追いかけるヒグマ、上空からおこぼれを狙うオオワシ……。他ではめつたに出会えない大型動物たちが自由をおう歌しながら生き生きと暮らしている——そんな情景です。

けれどそんな「野生の王国」のイメージだけで北海道全体を語れるかというと、残念ながら首を横に振らなくてはなりません。日本列島で二番目に大きなこの島(約7万8000km<sup>2</sup>、北方領土を除く)には今およそ568万人が住み、年間4500万人の旅行者が訪れます。島内で最も個体数の多い大型動物はヒトなのです。農地面積1万2000km<sup>2</sup>、乳牛・肉牛合わせた牛飼育数130万頭は全都道府県中ダントツの1位。北海道の農産物自給率はカロリーベースで200%に近く、広大な農地で大量生産した食料・飼料を島外に「輸出」することで道外人口をも支えています。また島の面積の7割は森林ですが、天然林はそのうち3分の2に過ぎません。アイヌモシリ(アイヌの静かな大地、の意)は北海道島がかつて誇つた優れた生物多様性は、和人民政府が「開拓殖民」を本格化させた明治以降の約140年間にずいぶん失われてしまいました。つまり「自然豊かな知床半島」は北海道のシンボルなどではなく、むしろ残り少ない例外といえるべきなのです。

意図せざる結果

開拓殖民が生物多様性を損ねたんだなんて、もしかしたらこんな視点は「自虐史観」だと感じる(フィードバックする)としています。冒頭に触れた知床半島でも、実は半島からオホーツク海に流れ込む91水系のうち約50の川々に大小合わせて350以上のダムが建設されて魚類の自由な行き来を妨げているのですが(ま)、世界遺産登録の条件として、それらのダム群を必ず再改修して流域生態系を復元しますと日本政府は世界に公約しています。建設当時は必要だと考えて造つたダムのはずですが、引き起こされた結果を真摯にフィードバックして、マニュアルに頼らないオーダーメイドの環境復元を試みようとしているのです。

エゾシカなど「増えすぎた野生動物」対策の場面でもまた、畑に出没したのをやみくもに撃つていた従来の有害鳥獣駆除方式を改め、群れの個体数の増減を科学的に監視しつつ年ごとに目標頭数を定めて捕獲するフィードバック管理を、全国の自治体に先駆けて北海道庁がスタートさせています。

「野生動物問題」と呼ぶなら、あつれきを埋め人間社会と野生動物たちとの間のあつれきを



自衛隊演習場内でイトウ繁殖地を直撃する形で建設された砂防ダム(上の写真、撮影筆者)。札幌防衛施設局は2006年、堤体にスリットを入れて復元を図ると公表した(下のイラスト。矢白別演習場・別寒辺牛川水系土砂流出対策等検討委員会「矢白別演習場・別寒辺牛川水系土砂流出対策等に関する最終調査報告書(案)」から引用)。

じになるかも知れませんね。でも島内のあちこちで、かろうじて生き延びてきた野生動物の地域個体群(ひと連なりの環境で暮らす生物種の集団)や彼らの属する生態系(同じ環境内に共存する生物種同士のネットワーク)が、現在進行形で危機にひんしているのを目の当たりにしたら、きつと状況の深刻さをお分かりいただけるはず。

例えば、国内最大級のサケ科淡水魚イトウの生息河川は1970年代には島内に約50水系を数えたのに、現在では比較的大きな個体群はわずか5水系6個体群まで急減してしまいました(注1)。河口域から支流上流部まで一本の川をくまなく移動しながら世代交代を繰り返すイトウたちにとって、河川改修やダム建設、河畔林(流域の周縁部に発達する森林)を皆伐しての農地化・都市化は致命的な打撃となりました。これは漠然とした印象ではなく、研究者たちがイトウの生態を克明に調べて明らかにした絶滅要因の数々です。

逆に爆発的增加によって自らが属する生態系のバランスを破たんさせているのがエゾシカです。年率およそ20%という驚異的な繁殖力で生息域を広げ、先々で森林生態系に自己修復不能なほどの食い荒らしの害を与えています。農作物の被害も甚大で、一時被害額が年間50億円を超えたのを、捕獲圧力の強化と、総延長3000kmに及ぶネットフェンスで農地を囲うことで何とかしのいでいるという状況です(注2)。

でもシカが増えたのは自然の摂理でしょう、ですって? いいえ、100年ほど前に絶滅寸前だったシカをここまで増やしたのは他ならない私たち人間です。農地開発や森林開発(林道整備)によってシカが好む「林縁環境」を劇的に生み出したからこそ、シカが増えたのです。そのうえ1990年代まで半世紀以上続けた保護政策(雌ジカ禁猟)がシカたちの繁殖を擁護してきました。ついですが、かつてシカの個

戻すしか解決の道はありません。フィードバック機構を内包するこんな新しい取組みの「胎動」を、これから私たち人間社会が上手に育て上げることができるとどうか。それが解決への扉を開く鍵なのです。

フリーランス記者 平田 剛士

注1 北海道在住。環境問題などを取材・報道。著書に『北海道ワイルドライフ・レポート』(平凡社)、『エイリアン・スピーシーズ』(緑風出版)、『ルポ・日本の生物多様性』(地人書館)など。

注2 川村洋司「幻の魚イトウの生態とその保護」(森誠一ほか監修・編『希少淡水魚の現在と未来』信山社、2005年)

注3 梶光一「エゾシカの保護管理計画と有効利用の可能性」(社団法人エゾシカ協会ニューズレターNo.20、2006年) 桑原慎知ほか「知床における河川情報の整理に関する試み」(ダム・2005年) 床博物館研究報告26、2005年)